

## 第 1 章

静止状態からの視点

- 1 面・マッスの大きさを強調する手法
- 2 縦・鉛直方向の高さを強調する手法
- 3 水平・奥行きの距離を強調する方法

## 1 面・マッスの大きさを強調する手法

主に建物を外部から見た時の効果を高める建築的手法。

ここでは、「巨大さ」と「重厚感」「威圧感」「圧迫感」が類似する感覚であるということを前提条件としたい。例えば $3 \times 3 \times 0.1\text{m}$ の板を二枚想像する。一つは石、もう一方はガラス製である。この板が平面上にたてられていたとしよう。その時に私たちは違う感覚を覚える。石造の板に対して、明らかに「重厚感」、「威圧感」を覚えるであろう。この二枚の板は全く同じ大きさであっても、人間に作用する「力」は全く異なるのである。この、口語的に言えばしばし「うっとくる」というような感覚は、巨大さに通じるものである。

この感覚は極めて主観的ではあるが、以下で建築意匠についての検証を述べる際に、このような感覚についての前提はあきらかにする。

### 1.1.1 単純拡大

最も根本的な建築的手法である。人間の日常的な生活感覚を超えるべく、巨大に拡大されたものを設計する。拡大率が高ければ高いほど、与える印象もちろん巨大になる。この手法において重要なことは、開口から柱にいたるまで、全て拡大率が同じであることである（プロポーションの維持）。つまり通常の建物を設計し、その図面を拡大コピーして施工するようなイメージである。外部内部ともに巨人のためにデザインされたかのようなこれらの空間は、我々人間＝『小人』にとって非日常であり、巨大な空間である。また、工場など、建築物の目的からして人間のサイズをはるかに超えるスケールで設計されている場合なども同様である。



図 カルナク神殿の多柱室

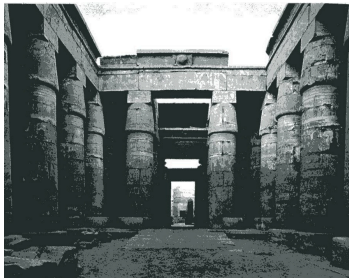


図 コンス神殿内庭

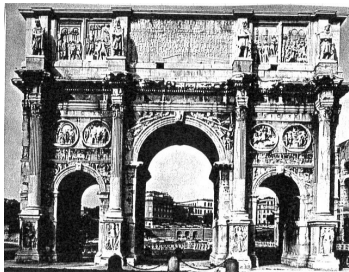


図 コンスタンティヌス帝の凱旋門



図 大谷石地下採掘場跡

＜カルナク神殿の多柱室 第19王朝 BC1320~1235＞

広さ東西52m 南北102mの場所に計134本の列柱が並ぶ  
直径3.6m 高さ20mの列柱は、第18王朝末期に始まった建築の巨大化の頂点を画する建築である。

＜コンス神殿内庭 第20-21王朝 BC1085~1054＞ カルナク

重厚な比例は、新王国時代の神殿建築に共通して見られる特色である。

＜コンスタンティヌス帝の凱旋門 315＞ イタリア

プロポーションを維持したまま巨大にしている。

＜大谷石地下採掘場跡（大谷資料館）1919~1986＞

1919年から1986年までの約70年、大谷石を掘り出した結果出来た巨大な地下空間である。広さ20000㎡、深さ30mある。坑内の年平均気温は8℃前後で、入ると肌寒い。一面石で囲まれたこの空間は、地下であるが故に外部から完全に引き離され、また人間の身体感覚を完全に逸脱している。





図 ミラノ中央駅 上：外観ドローイング 下：内観ドローイング（共にスタッキーニ）

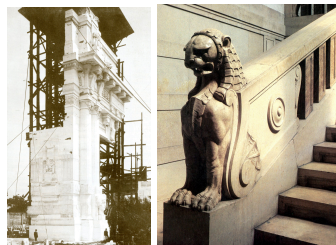
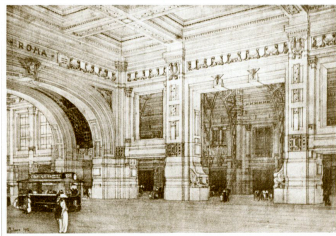


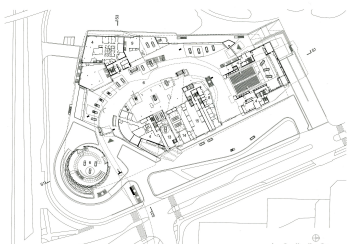
図  
上左：ミラノ中央  
駅 建設途中  
上右：階段の意匠  
右：内部写真



図 黒部ダム HP より



図 BMW 博物館  
上 内観  
下 プラン（一部）



## <ミラノ中央駅 1931> イタリア

ウリッセ・スタッキーニ設計。 ファシスト政体の権力を象徴するデザインとなっている。幅200m高さ72mの巨大な正面ファサードに加え、広さ、高さ共に拡大された巨大な内部空間もヒューマンスケールを逸脱し、訪れる人々を圧倒させる。

また、1.7で後述する「重い素材の選択」もとられ、鉄骨像であるが石造のような重厚的なデザインがなされ、細部の彫刻なども、威圧的な印象を強調している。

天井に開けられた開口は、2.3の「トップライト」であり、天井高の高さをより高く見せている。

## <黒部ダム 1963>

高さ186m。堤頂長492m。総貯水量は約2億 $\text{m}^3$ にのぼる日本で最大の水力発電ダムである。

立山黒部アルペンルートの長野側起点として有名な観光名所で、これまでに訪れた観光客は延べ4千万人以上、現在も毎年100万人以上の観光客が黒部ダムを訪れている。公式ホームページなどでも、その巨大さがたびたびうたわれている。

## <BMW博物館 2006> ドイツ

コープ・ヒンメルブラウ設計。

車を展示する博物館のため、建物の基準が「人」ではなく「車」である。このことは、図面に車の位置が詳細に描かれていることでもわかる。巨大な内部空間は壁やスラブで分断されことなく維持され、訪れる者に非日常的な印象を与える。

内部の空中廊下や階段は全てフューチャリスティックな曲線で構成され、マテリアルも金属的な光を放ち、車のデザインとの融合に成功している。

### 1.1.2 大きさを引き立てる小さな要素との対比

小さな要素を挿入することにより大きさを際立たせる建築的手法である。対比される小さな要素との違いが大きければ大きいほど、巨大性はより強く感じられる。小さな要素は、なるべく人々に大きさのイメージが湧きやすいものが良い。例えば通常の扉は、正確な大きさの定義はなくても、「人間が一人ずつ通れる大きさ」であるというイメージが我々の中にある。もちろん、実際は通常の扉よりも小さくても、また大きくても良い。しかし、建物に対して扉が小さい場合、感じられる印象として相対的にその建物は巨大に感じられるのである。また、小さな要素は整然と並べられている方が「圧迫感」は強められる。

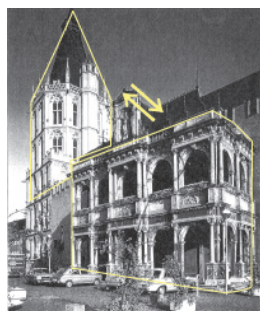


図 ケルン市庁舎正面入口 写真

＜ケルン市庁舎正面入口 1414＞ ドイツ

高さ62mの太めのプロポーションである。手前の二層の建物部分ゴシックの部分（手前の二層の建物部分）には細く細かい装飾が施されているのに対して、その奥に見える塔は比較的プレーンな印象。細かな装飾との対比を強めている。



図 パラッツォ・ドゥカーレ 写真

＜パラッツォ・ドゥカーレ 1465年頃＞ ウルビーノ

ルチアーノ・ダ・ラウラーナ設計。ウルビーノ公フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロの館。

巨大な柱に開けられた小さな開口が、より一層柱の巨大さを強調している。

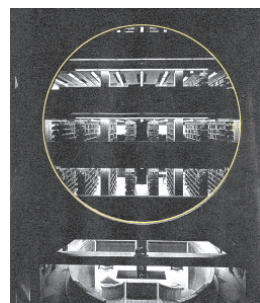


図 フィリップ・エクセター・アカデミー美術館

＜フィリップ・エクセター・アカデミー美術館 1972＞

ニューハンプシャー

ルイス・カーン設計。閉鎖しつつ、吹き抜けに向けて解放された書庫。本の大きさと開口の大きさとの対比が、結果的に壁面全体との対比となり、手前の吹き抜け空間の大きさを強調している。

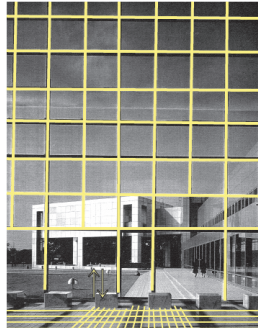


図 群馬県立近代美術館 写真

<群馬県立近代美術館 1974> 群馬県

磯崎新 設計。

共に正方形の並列した窓枠と床のタイルとの対比が、壁面の大きさ、空間の大きさを強調。通常対比される要素は同じ形とは限らないが、この例では形状を同じにすることで、自然と対比要素としての認識を強めている。



図 上海万博

<上海万博 万博文化センター（現メルセデス・ベンツ アリーナ）2010>

巨大な円盤形の建築。開口のない宇宙船のような建物。中央を囲うように設けられたバルコニーは、真っ白な建築の中で、黒い線のように際立っている。このバルコニーの作り出すラインは水平方向を強調するとともに、バルコニーから外を見る人々の大きさと建物の大きさの対比を、遠くからも浮き立たせる。

### 1.1.3 前方へのせり出し

前方へのせり出しも巨大さを強調する建築的手法である。二枚の同じ大きさの板が立てられていたとして、一方の板に、凸状のこぶをつける。観察者に対して「迫る」という感覚がそこには生まれる。この前方にせり出したものは庇であったりバルコニーであったり、様々な形態をとるが、これらのせり出したものがあるべく巨大であればあるほど、建築物の主張は強まり巨大に感じられる。この手法は、建物を巨大に見せる最も常套的手法であると言える。様々な形で多くの建物に用いられている。

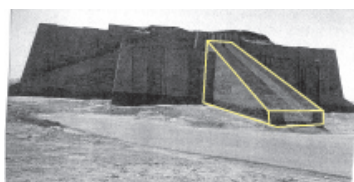


図 ウルのジググラド

＜ウルのジググラド ウル第3王朝 BC2100＞ ウル

石が積み上げられ、開口のないマスの印象の強い建築。推計される大きさ 60m × 45m の平面、高さは 25m である。前方にせり出した階段により、更に見る者に対して巨大さが強調されている。

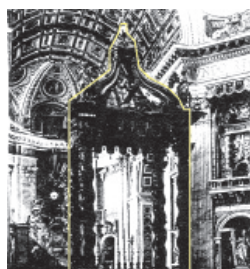


図 サン・ピエトロ大聖堂の  
天蓋

＜サン・ピエトロ大聖堂の天蓋 1624~33＞ ローマ  
(正面の主祭壇は 1656~66)

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ設計。建築と彫刻の総合的作品。聖ピエトロの墓の上であって、その永遠性を記念するために作られた。サン・ピエトロの聖なるモチーフであった「ねじり柱」を主題として用いている。このような天蓋はガブリエル・ル・デュク (1625~66) 設計のヴァル・ド・グラースの六本柱円形平面の天蓋 1654 など、広く広まった。天蓋が全面にせり出すことで、聖堂内の空間の大きさを強調している。



図 サンタンドレア・アル・  
クィナーレ聖堂

＜サンタンドレア・アル・クィナーレ聖堂 1658~70＞ イタリア

ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ設計。  
半円形に大きくせり出した入口と、それを強調するように同じく半円形にデザインされた階段、壁面の半円形の意匠。また、上部の見下ろすように作られた石の彫刻など、非常に細かな点までせり出し効果が設計されている。

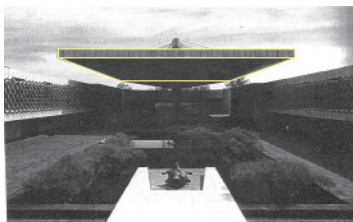


図 人類学博物館

＜人類学博物館 1963~64＞ メキシコ

ペドロ・ラミレス・ヴァスケス設計。つり下げられた板が大きくせり出している。

このように大きく空中にせり出すことが構造的に可能になり、これまで



にはない強烈な印象を残す新たな建築が出現する。

#### <舞台芸術シアター 1969> フィリピン

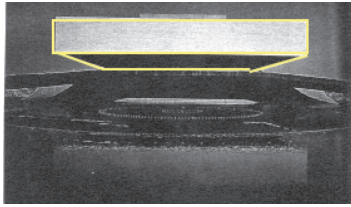


図 舞台芸術シアター

レアンドロ・レ・ロキシシ設計。マニラでは1900頃スペイン支配からアメリカ支配に変わり、建築の近代化が始まった。この舞台芸術シアターはフィリピン文化センターの中心施設で、センター全体の視覚的な焦点となっている。オーディトリウムを収めた背の高いマッサと腰壁の上に浮遊するようなトラバーチンのマッサとを併置した抽象的な構成をとり、それらが池に映し出され荘厳なモニュメンタリティを生んでいる。

#### <大学セミナーハウス 1965>

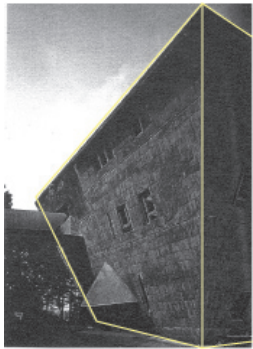


図 大学セミナーハウス

吉阪隆正設計。大地に楔を打ち込んだような力強さ。上部に向かってせり出す。グラデーションのように徐々にせり出すため、1.5.2の湾曲面にも似た手法だが、湾曲面に作用する「包み込む」ような効果はないのでこちらの例で取り上げた。

#### <モスクワ大学 1952> ロシア

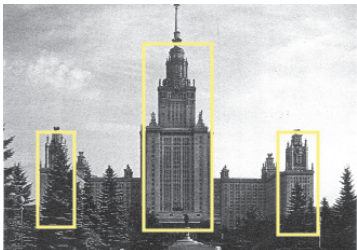


図 モスクワ大学

レフ・ルドネフ設計。社会主義リアリズム建築の代表的存在スターリン・デコ。非常に象徴的で威圧的な意匠は、規則的に並んだ小さな開口で壁面を強調したファサード、両翼と中央が大きくせり出した平面形が大きく作用している。

#### <ストゥビニージ離宮 1729~33> トリノ

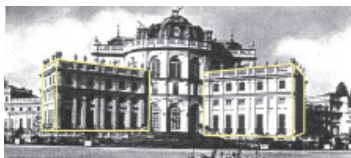


図 ストゥビニージ離宮

設計者のフィリッポ・ユヴァラ(1678~1736)は、ベルニーニの影響を受けた建築家である。

中央の大広間を中心にして翼が6方向に放射状に広がる壮大な平面形。これは、階段広間を中心とするフランスのシャトー形式とイタリアの星型平面とを結合した考えである。

#### <国立屋内総合競技場 1964> 東京

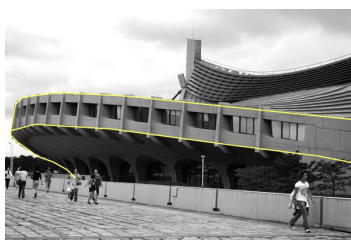


図 国立屋内総合競技場

丹下健三設計。

吊り構造により端に向かって浮いた屋根は、曲面となってせり出し、体育館をより巨大なものに見せている。

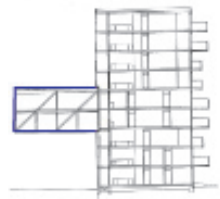
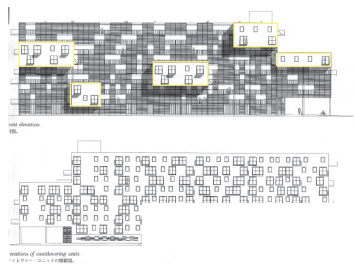


図 WoZoCo  
(上から順に)  
立面図二面  
断面図一面  
写真

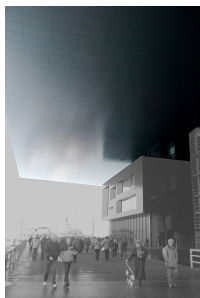


図 KKL 写真 2 枚

## < WoZoCo > オランダ

MVRDV 設計。

片面は小さな開口は並び、壁面としての意匠を強調。反対側のファサードは住戸の入った巨大なキャンチレバーがせり出す。直線的で（キャンチレバー以外の）凹凸のない壁面からランダムにボリュームがせり出したファサードは圧巻である。

## < 総合文化センター KKL (ルツェルン・カルチャー・コンGRESセンター) 1998 > スイス

ジャン・ヌーヴェル設計。

23m も湖面にに向かってせり出す庇が印象的な建物。庇の厚みが薄い（庇の先端に向かって薄くなる意匠）威圧的な印象はない。しかし軽やかな屋根の下に立つと、その巨大さが感じられる。



図 兵庫県立美術館 写真

#### ＜兵庫県立美術館＞

安藤忠雄設計。大きくせり出した庇が特徴。同様の手法はフォートワース美術館にも見られる。また、美術館の周囲には樹木の果てしない反復も見られ、広大さを強調している。



図 フェスティバル・ゲート

#### ＜フェスティバル・ゲート 1997＞

大型遊具や娯楽施設と商業施設を合体させた「都市型立体遊園地」として開業する。中央に空洞のあるビルにはジェットコースターがとりつく。ジェットコースターのレールも建物からせり出しているが、ジェットコースターの通過時の音もせり出しの印象を強める。

### 1.1.3.' 湾曲面

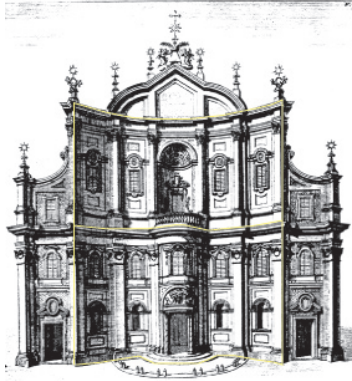


図 サン・フィ  
リッポ・ネーリ  
祈祷所  
上 ファサード  
右 時計



1.1.3 前方へのせり出しに似た建築的手法である。湾曲面にすることで、観察者に対して「迫る」部分が必ず出現する。ただし、「迫る」部分が 1.1.3 「前方へのせり出し」の例のように、凸状の別要素ではなく、板自体の変形によるものであるという点で異なる。せり出し方が曲面であることで、威圧感は 1.1.3 せり出しに比較して和らぎ、また見る者に「包み込む」という印象も与える。

＜サン・フィリッポ・ネーリ祈祷所 1637~40＞ イタリア

フランチェスコ・ボッロミーニ設計。

一階は凹凸凹、二階は凹凹凹という曲面をもつ。歪み。

湾曲面は細部の意匠（時計など）にまで及ぶ。

＜サン・カルロ・アッレ・クアットロ・フォンターネ聖堂 1665~67＞  
イタリア

これもフランチェスコ・ボッロミーニの設計である。



図左 ダウン・キンスキー 宮殿

図右 サン・カルロ・アッレ・クアット  
ロ・フォンターネ聖堂

＜ダウン・キンスキー宮殿 1713~1716＞ ウィーン

ヨハン・ルーカス・フォン・ヒルデブラント設計。1.3 の「前方へのせり出し」で挙げた「皇太子オイゲンオイゲン公の宮殿」の例と類似しているが、せり出し部分が直線的か湾曲面かで印象は異なる。

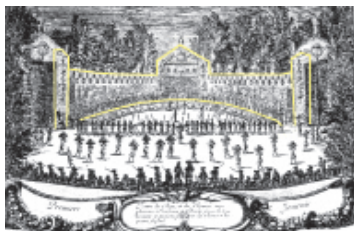


図 ヴェルサイユ宮殿野外バレエの舞台  
装置

＜ヴェルサイユ宮殿野外バレエの舞台装置 1664＞ フランス

「魅惑の鳥の喜び」の舞台装置を描いたシルヴェストル刻銅版画。パリ国立図書館蔵。

舞台装置は限られた舞台の中で、しばしば「大きく（広く）見せること」を必要とする。この例は、遠近法も用いられているが、湾曲面によって、壁の巨大さをより強調している。



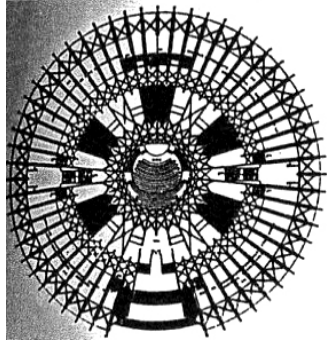
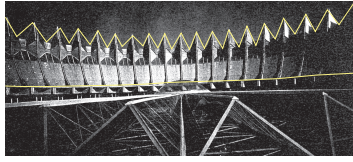


図 国立芸術文化会館  
上 写真 下 平面図

# ＜国立芸術文化会館 1972＞ スペイン

フェルナンド・イゲーラス設計。

コンクリートの可塑性への信頼と憧れ。エレメントに文節されることを拒む。巨大な歯車のような造形。

このような円形のプランは、中に入ると湾曲面となり、上述の例と同じ効果が得られる。このような効果は、円形プランのスタジアムなどに共通して見られる。



図 松濤美術館

# ＜松濤美術館 1981＞

白井晟一設計。

紅味を帯びた韓国産の花崗岩（紅雲石）の積み上げられた重厚な外壁面は湾曲し、建物の存在感を高める。その効果を更に高めるように、頭上からは大きな庇がせり出している。



図 グランドプリンスホテル  
赤坂

# ＜グランドプリンスホテル赤坂 1982＞

丹下健三設計。全高 138.9m。

両翼が大きくせり出した外観。段々にせりだしたファサードは、湾曲面のような「包み込む」ような印象のほか、鉛直方向の強調（縦線の強調）も見られる。